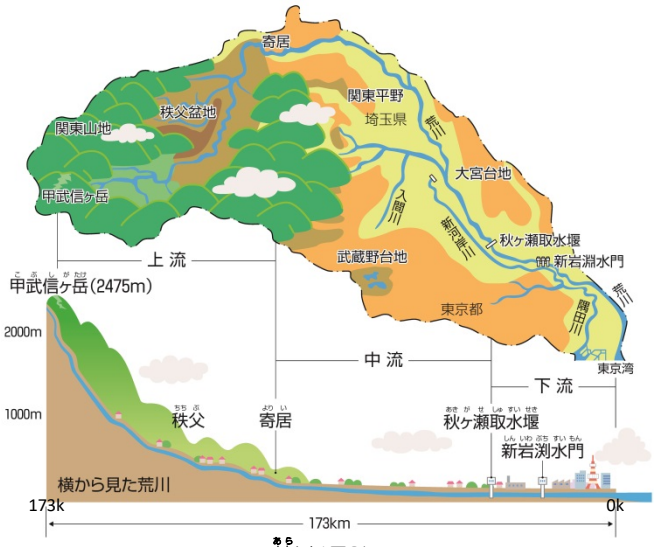
河川距離標　～河川管理に必要不可欠な「川標」～

河川距離標には「川の名前」、「右岸、左岸」、「距離」、「地先名」が表示されています。

河川距離標（大井大橋付近）

表示内容



荒川173km

河川距離標とは

河川距離標は、国土交通省の管理する河川において、川の調査や維持管理を行うため、目印に左右岸の堤防に河口を起点として、川の中心を基準に等間隔で設置しています。

かつては、木杭や石杭が用いられていましたが、現在では、ほとんどがコンクリート製の杭が用いられています。

私たちの家や土地は「番地」で表しますが、河川の中では、その位置を「河川距離標」を基準として表します。例えば、河川距離標「35.0K」より800m上流の位置は、「35.8K」となります。

荒川では、河川の両側にある堤防のり面などに、一定の間隔で「河川距離標」が設置されています。

河川距離標（墨田区東墨田）

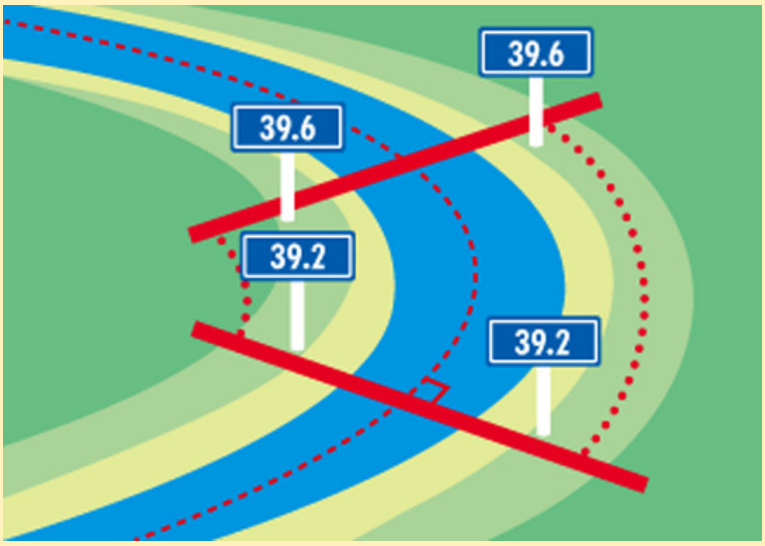
▶ 低水路の中心で測る河川距離

川の中流では400m毎にキロ杭（距離標）を設置しています。

河川の流心（川の流れの真ん中）で距離を測り、そこから直角に左右岸の杭を設けることになっています。

支川のキロ杭は、本川との合流地点を0kmとして設置されています。

※上記は基本的な考え方になります



▶ 荒川の0km地点について

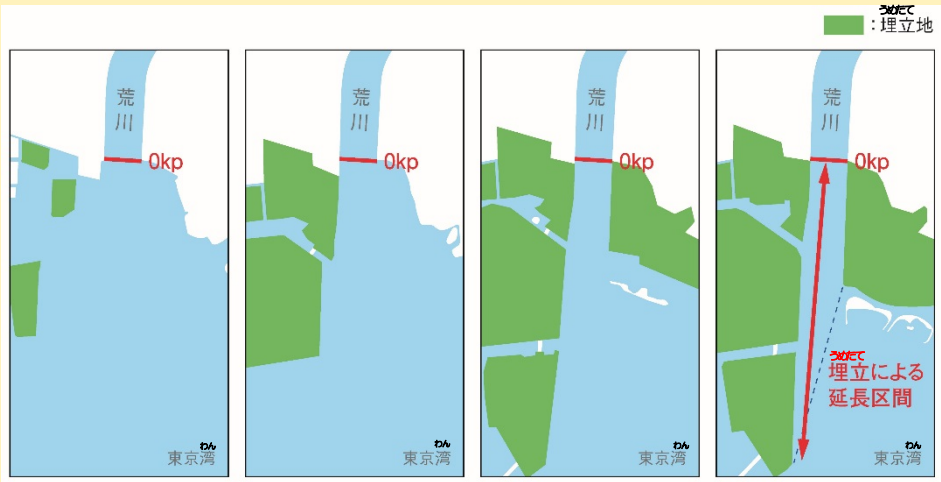
荒川の全長173kmとは、埼玉県秩父市にある荒川の起点から、東京湾に注ぐ河口付近の河川区域としての荒川の終点までの距離を表しています。

荒川の河口からの距離を示す距離標。その0km地点が河口付近にあります。

法令上の荒川（河川区域）は、まだその先も続いていて、源流点からの173kmの終点になる地点は東京湾の中にあります。

0km地点はかつて河口とされていた場所でしたが、徐々に埋め立てられ、荒川が東京湾側に延びていきました。

現在の荒川の終点は、東京湾に突き出した尖った先端になりますが、0km地点は変えずにマイナス0kmというように管理されています。



（資料：「国土地理院空中写真」より作成）

コラム ヨハネス・デ・レーケの提案により始まった河川距離標の設置

現在見られるような「河川距離標」の設置は、オランダ人技師であるヨハネス・デ・レーケが提案したことに始まります。デ・レーケが1878（明治11）年に木曽三川を調査して、その結果を「木曽川下流概説書」として報告をしていますが、その中に「距離標」に関して『標識　前野村ノ下流ヨリ海口ニ至ルノ間、仮定メタル新木曽川ノ河床ニ標杭ヲ設クヘシ、此ノ杭ハ距離毎弐丁ニシテ凡流心トナルヘキ所ヲ測リコレヲ傍フテ設置シ、而シテコレヲ図上ニ記載スベシ。』と提案しています。

現在では、このようにして設置された明治時代の河川距離標を見ることは出来ませんが、当時の図面には、二丁（約218m）間隔に河川距離標が書き込まれ、分子には「里」、分母に「丁」が表示され、「丁杭」と呼ばれていました。

現在のようにメートル表示とされたのは昭和初期、この時、河川距離標の位置も変更されたものと思われます。

出典　国土交通省東北地方整備局HP／国土交通省中部地方整備局HP